審査員特別賞
最相葉月賞

ももたろうとぼくのなつ

林　祐輝

6月14日、ももたろうがぼくのうちにきた。きょ年、いとこのひろくんや、ともだちのいっちゃんがかっていた。ぼくもかいたかった。でも、おかあさんが「じぶんでせわができないから、だめ」といっていた。ぼくはことし1年生になった。もうせわができる。そろばんの先生に、かぶと虫をもらったんだ。先生が、なまえは「ももたろうにしてね」っていったから、ももたろうだ。

おかあさんといっしょに、どうやってせわをしたらいいか、本でしらべた。プラスチックのケースに、こん虫マットを10センチぐらい入れたらいいみたいだ。こん虫マットは、手でぎゅっとにぎって、かたまるくらいに、水でしめらせる。えさは、こん虫ようゼリーがうってある。りんご、パイナップル、ばななもたべるみたい。なつは、くだものがくさりやすいから、まい日かえたほうがよさそうだ。ゼリーも、2、3日で、かえたほうがいいとかいてあった。とまり木もあったほうが、たのしそう。ひっくりかえったときも、おきあがりやすそうだ。

つぎの日、おとうさんと、いるものをかいにいった。しらべたとおりに、こん虫マットをしめらせて、ももたろうのいえを、つくった。ももたろうはひろいいえにうつって、うれしそうだった。がさごそと、こん虫マットの中にもぐっていった。

いつもゼリーだと、あきるかなーとおもって、ばななをあげてみた。でも、あまりたべていなくて、くさくなってきた。ちいさな虫もでてきたから、やっぱりゼリーにした。きれいにしておかないと、かぶと虫に虫がついたり、びょうきになってしまう。

ぼくは、かぶと虫のことをもっとしりたくなった。学

校のとしょのじかんに、こん虫のずかんをかりてかえった。こん虫のことがいろいろのっている、とてもぶあつい本だ。おかあさんは、「こんなにおもたい本をかりてきて」といったけど、ぼくはへいきだった。

かぶと虫のなかまは、たくさんいることがわかった。くわがた虫とか、てんとう虫とか、ほたるもかぶと虫のなかまなんだって。ときどき、うちのあみどにとんでくるかなぶんとか、このまえ、おかあさんが、にわでつかまえてみせてくれた、ごまだらかみきりも、かぶと虫のなかまだった。

かぶと虫は、だいたい1か月ぐらい生きるみたいだ。でも、じょうずにかえば、2、3か月生きられるとかいてあった。ぼくは、すこしでも、ももたろうといっしょにいたいとおもった。一生けんめいせわをしようとおもった。

ももたろうは、おすだけど、めすといっしょだと、土にたまごをうむ。たまごからよう虫になって、よう虫のからをぬぐと、さなぎになる。そのときに、もうつののかたちができている。そして、さなぎのからをぬいで、はねがかたまると、土の中からでてくる。

ぼくも、かぶと虫がうまれるところから、そだててみたいとおもった。ももたろうも、ひとりじゃさびしいとおもう。めすをつかまえにいきたいとおもった。

おとうさんにおねがいして、かぶと虫をとりにいくことになった。わなをしかけにいく、まえの日のよる、わなに入れるえさをじゅんびした。本にかいてあったように、ばななをきって、しょうちゅうにつけた。おとうさんは「もったいない」といった。おとうとのなおきは「くさっ」といった。ぼくとおかあさんは「いいにおい」といった。そのままつぎの日までつけておいた。

つぎの日の夕がた、とんだちょ水ちに、わなをしかけにいった。3つしかけた。くぬぎの木がよくわからなかった。どうか、つかまえられますように。

そしてまたつぎの日のあさ、あさごはんのまえにわなを見にいった。ありばっかりだった。ぼくはがっかりした。おかあさんが、「いっちゃんのママに、どうやって

つかまえたかきいてあげるから」といってくれた。またらいしゅうチャレンジだ。

いっちゃんのところは、かっていたかぶと虫のえさのゼリーを、にわにすてていたら、とんできたみたいだ。そうか！ゼリーをわなにしかければいいんだ。こんどは、くぬぎの木もちゃんとしらべた。目じるしは、はっぱにぎざぎざがある。

こんどは、いえのちかくの、せいたの森に、あさ6じごろしかけにいった。夕がたからあさまでだと、じかんがながすぎて、えさをぜんぶたべてしまうかもしれないとおもったからだ。そして、あさごはんをたべてから、8じごろ見にいった。いなかった。おとうさんが、「そのままよるまでおいておこう」といった。よ中におとうさんが見にいってくれた。それでもいなかった。かぶと虫をつかまえるのは、むずかしかった。

ももたろうは、とてもげんきで、よるになるとよくがさごそとうごいていた。えさのゼリーも、さいしょは2日か3日で一つたべていたのに、まい日やらないとたりなくなってきた。

ある日、おじいちゃんが、いのちのたびはくぶつかんの『せかいのこん虫てん』につれていってくれた。ぼくは、まえにえ本でよんだ、せかいで一ばん大きな、ヘラクレスオオカブトが見たかったんだ。こうらがツヤツヤひかっていた。大きさは、ちょうどぼくの手をひろげた、おやゆびからこゆびまでのながさだった。ほんものを見ることができて、とてもうれしかった。

なつ休みのおわりごろ、だんだんももたろうのげんきがなくなってきた。ゼリーをたべるりょうもへってきた。よくひっくりかえって、じっとしている。まえは、ひっくりかえっても、足をじたばたさせていたし、じぶんでもとにもどることもできたのに。おかあさんが、「ももたろうは、すずしくなってきたから、よわってきたのかもしれないね」といった。ぼくは、おかあさんに「ももたろうを森にかえしてあげよう」といった。すると、おかあさんは、「ももたろうはもうよわっているから、じぶんでえさも見つけられないかもしれないし、て

きにやられちゃうかもしれないよ」といった。それはたいへんだ。やっぱり、ぼくがせわをすることにした。

9月10日、学校からかえってきたら、おかあさんが「ももたろうがひっくりかえったままなのよ」とおしえてくれた。ぼくはおそるおそるさわってみた。ぜんぜんうごかない。しんでしまった。おじいちゃんが、「にわにうめてやろう」といった。おじいちゃんと、おとうとのなおきといっしょに、木の下にあなをほって、そっとうめた。なおきは「足がうごくようになったら、だしてあげようね」といった。もう、うごかないのに。『ももたろうのはか』と、木のきれはしにかいて、たてた。

よるごはんのとき、おかあさんが「ももたろうは、ゆうきにせわをしてもらって、しあわせだったかな?」ときいてきた。ぼくは、なみだがでてきた。わからない。おかあさんに、「えさをやってないよ」とか、「こん虫マットをいれかえてやりなさい」とかいわれて、めんどうだな、とおもったこともあった。ももたろう、どうだったかなあ。わからない。となりでおかあさんもないていた。

おかあさんに、「ももたろうは3か月生きた?」ときくと、「あと4日で、ももたろうがゆうきのいえにきて3か月よ。よくせわをしたね」といってくれた。せわをするのはたいへんだったけど、ももたろうと、ながいながいなつがすごせて、よかった。